

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K21010

研究課題名（和文）占領期・高度成長期・戦後後期の展示空間に関する研究

研究課題名（英文）Exhibition Installations in Postwar Japan: The US Occupation, Rapid Economic Growth and its Aftermath

研究代表者

辻 泰岳 (Tsuji, Yasutaka)

慶應義塾大学・政策・メディア研究科・特任助教

研究者番号：10749203

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：

占領と高度経済成長、それ以降に開催された展覧会や博覧会を検証した。アジアおよび太平洋上の大戦後には、複数の言語で記された図書や雑誌、国境を越えて巡回する展覧会、あるいは万国博覧会などが、同時代の美術および建築を他国に紹介するため概況としてまとめる役割を担った。ただしこうした機会に自らの運動を位置づけようとした作家や評論家たちの言説等が以後もそのまま援用されたことが、一方では実証を長らく妨げる要因になってしまったことも否定し難い。そのためこの課題では、こうした人々とは異なる観点で歴史を叙述するために、展示空間において作品やそれを評価するための基準がどのようにかたちづくられたのかを詳かにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

美術史では近年、大戦後の国際的な交流や文化の外交に関する検討が進んでいる。本研究はこうした検討に続き、展示空間を壁や柱、床などを含むものの拡がりとして読み解くことで、作家と作品の関係だけでなく、それらを取りまく社会とともに明らかにしようとする点に特色がある。また関連して、世界の各地においてモダニズムがいかに受容されたのかを問う研究もさかんに進められている。ただしこれまで当時の日本の動向が海外で紹介される際には、日本語ですでに発表された成果が十分に参照されないことも少なくなかった。対してこの課題では各地の研究者たちと共にこれまでの成果を整理し、基盤を国際的に構築することも心がけた。

研究成果の概要（英文）：

This study investigated installations in exhibitions and expositions across the US occupation, rapid economic growth period and its aftermath. Following World War II, publications in multiple languages, exhibitions shown in both the western and eastern blocs, and international expositions provided overviews of contemporary Japanese art and architecture to foreign countries. Yet as artists and critics opportunistically used these to promote their own activities, on the other hand, it is difficult to deny that their discourse repeated verbatim has prevented the materialistic evaluation of the postwar as history. Thus, in order to take an approach in describing this period different from that taken by artists and critics, this research analyzed how works of art and the criteria used in the critiques were formed by displays.

研究分野：美術史

キーワード：モダン・アート クラフト ファブリケーション 民俗 マス 量産 視覚 ヴィジョン

1. 研究を開始した当初の背景

美術史および建築史において、アジアおよび太平洋上における大戦後（戦後）の動向については国の内外を問わず成果の蓄積が進んでいない。ただし2014年に刊行された『美術の日本近現代史』で佐藤道信が指摘するように、「戦後現代の美術は、「現代」が大きな転換期を迎えた一九九〇年代以降に歴史化が始まる状況」にあり、以後は論ずる対象に応じて概念を規定しながら成果を積み重ねていく段階にある。また戦後については「Tokyo 1955-1970」展（2012年）や「Gutai: Splendid Playground」展（2013年）など、海を越えた世界の研究者たちと共同する成果も示されている。そしてこうした成果では大戦後の動向を、戦前から続けてどのように位置づけるかという点も課題として指摘されている。日本学術振興会の特別研究員として取り組んだ課題「戦後日本の芸術運動と展示空間に関する研究：都市と環境を中心に」および2014年に東京大学に提出した博士論文は、こうした研究の動向をふまえている。

一方で同年からコロンビア大学で進めた在外研究中に自身の成果を紹介した際、日本の美術および建築は当時、ヨーロッパやアメリカ合衆国、あるいは極東の他の地域とどのように影響を与え合う関係にあったのかという点について壇上で議論する機会に恵まれた。この点とも関連して、たとえば『Postwar Japan as History』の編者であるアンドルー・ゴードンは、1945年から1990年までを「戦争直後としての戦後」「高度成長期としての戦後」「戦後後期」と3つの期間で示すことによって、国別に歴史を叙述する従来の方法を改めることを提唱している。そこでこうした議論をふまえながら、本研究では1940年代の後半から1980年代の後半までの極東とアメリカ合衆国との関係に焦点を絞り、近過去でもある戦後について多角的に考察を進めた。

2. 研究の目的

戦後に日本および関係する地域で開催された展覧会や博覧会を事例とした。建築史では同時代の体験をふまえて戦後を記す布野修司の『戦後建築の終焉』（1995年）や、戦後を体現する作家として丹下健三を位置づける藤森照信の評伝『丹下健三』（2002年）、あるいは思想史として20世紀を叙述する八束はじめの『メタボリズム・ネクサス』（2011年）など、稀少ではあるが代表的と呼ぶべき成果も示されている。だがこれらに続き戦後を史的に扱う研究は未だ乏しく、さらには作家と作品の関係がある分野の閉じた問題として扱われることによって、同時期の動向を扱う美術史との研究上の接点は失われたままにある。そのため本研究では占領と高度経済成長、それ以後に開催された展覧会や博覧会に関する成果を段階的に発表することで、従来の分野や国家の枠組みを超えた戦後の像を示した。

3. 研究の方法

これまでの課題では展示を企画するために用いられた手紙や図面、写真、口述の記録などをふまえ、作品等が展示される空間を復元的に読み解くことで成果を示してきた。本研究においても、国内外のミュージアムやライブラリーに保管されていた資料を用いて展示空間を検証した。またそれによって、戦後の文化が必ずしも日本という国家の中だけで醸成されたわけではなく、様々な地域で開催された展覧会や博覧会においてかたちづくられたことを明らかにした。

4. 研究の成果

平成28年度（2016年度）

初年度にはモントリオールで開催された万国博覧会（1967年4月28日～10月27日）について調査を進めた。当時の美術および建築をふりかえる際には、1964年に東京で開催されたオリンピックや1970年に大阪で開催された日本万国博覧会を背景としてふれることが一般化している。しかしながらモントリオールのこの博覧会は海外で開催されたこともあり、これまで史的に検証されることは必ずしも多いたとはいえなかった。そこで本研究ではモントリオールのCCA（カナディアン・センター・フォー・アーキテクチャー）に保管されていた図面や写真等を用いて、この博覧会のために建設された日本館を東西の諸国によるパビリオンと比較した。またそれによってこの日本館が他のパビリオンで展示された「環境芸術」と対比的に評価されたことや、それが3年後に開催を控えていた大阪の博覧会に与えた影響を明らかにした。

上記についてはまず、2016年9月に東北大学で開催された「アジアの建築交流国際シンポジウム」（International Symposium on Architectural Interchange in Asia）で審査され、口頭で発表する機会を得た。またこの発表をきっかけとして、2017年1月にローマで開催された展覧会のために刊行されたカタログにも論文が掲載された。

平成 29 年度（2017 年度）

ニューヨークの MoMA（ミュージアム・オブ・モダン・アート）で開催された「Shinjuku: The Phenomenal City」展（1975 年 12 月 16 日～1976 年 5 月 7 日）に関する成果を発表した。ポスト・モダナイゼーションという転機を訴えようとする点で名高い「The Architecture of the École des Beaux-Arts」展とほぼ同じ会期で開催されたこの展覧会については、図録が刊行されなかったこともあり不明な点が多く残っていた。そこで本研究では、占領と高度経済成長を経た新宿が、この展覧会でニューヨークの観客にどのように示されたのかを明らかにした。この展覧会を企画した建築家のピーター・グラックと歴史家のヘンリー・スミス、評論家の多木浩二は、人々が行き交うターミナルの写真や構内のレストランで提供される料理の模型、そして《Experience Map》（のちに《イメージ・マップ》と改題）などを設置することで、いわば「生きられた」都市とでもいふべきありようを展示室で再現しようとした。ただし本研究では、かれらがこのように読み解いた都市の力を、ミュージアムの中でどのように表すことができるのかという点についても考察を進めた。この成果については 2017 年 10 月に中国の天津で開催された「東アジア建築文化国際会議」（East Asian Architectural History Conference）で発表した。また関連して、国立近現代建築資料館で開催された「紙の上の建築」展（2017 年 10 月 31 日～2018 年 2 月 4 日）の図録にも寄稿する機会を得た。

平成 30 年度（2018 年度）

発足した当初の国立近代美術館（のちの東京国立近代美術館）と、その特別展（企画展）に関する成果を発表した。終戦の直後から 1950 年代には、近代という名を掲げる新たな美術館を建設するための運動と、デパートメント・ストアや画廊、公園等を発表の場とする運動が入り交じっていた。だが谷口吉郎や丹下健三といった建築家たちが「芸術の総合」と称しこうした会場を設計していたことは、文化をめぐる産業や政策の再編が一段楽すると、次第に二次的あるいは副次的な実践とみなされるようになった。また明治や大正、そして大戦下に開催された博覧会や展覧会についてこれまで研究が進められてきた一方で、以降の動向に関しては検討が進まず、その成果をどのように位置づけていくかという点については課題のままにある。そこで本研究では、東京国立近代美術館に保管される調書など先行する成果では検討されていなかった資料を用いて、このミュージアムの性格を規定した敷地の選定や建築物の改修、そして同館で開催された「日本近代美術展：近代絵画の回顧と展望」（1952 年）や「日米抽象美術展」（1955 年）、一連の「現代の眼」展について検証した。それによって本研究では、こうした特別展の作品がそれをつくりだした作家によってだけでなく、ディスプレイを含めてどのように視覚化されたのかを読み解いた。

なおこの研究と横断的に進展させるために、田中一光アーカイブに保管されている資料の調査を進め、DNP 文化振興財団の紀要にも論文が掲載された。さらにこの課題との関連で、2018 年 7 月 14 日に津田塾大学で開催されたデザイン史学研究会のシンポジウムでも口頭で成果を発表する機会を得た。

令和元年度（2019 年度）

最終の年度にあたる 2019 年度には「Japanese Household Objects」展（1951 年 4 月 17 日～6 月 18 日）に関する資料の分析を進めた。MoMA で開催されたこの展覧会には、建築家のアントニン・レーモンドとノエミ・レーモンドが収集した器物や、陶芸家の八木一夫が制作した花器が並んだ。ただしこの「Japanese Household Objects」展は、ジョン・D・ロックフェラー3 世とブランシェット・ロックフェラーが進めようとしていた外交をいち早く視覚化する空間でもあった。他方、この会期中にはレーモンド夫妻がイサム・ノグチと共に設計したリーダーズ・ダイジェスト東京支社も竣工する。アントニンとノエミは「Japanese Household Objects」展に続き、このホールで開催された「現代日本陶磁展」（1951 年 9 月 17 日～29 日）にもかかわるが、要人が集まるこの展覧会もやはり外交の渦中にあった。本研究ではこうした一連の展示において、建築や絵画、彫刻、工芸等が押し並べて日本を紹介するための用品として扱われることによって、当時の外交がこうした造形の区分を再編する契機でもあったことを読み解いた。なおこの成果は論文として『文化資源学』に採録されることが決定している。

また 2019 年度には『国立国際美術館ニュース』にも寄稿する機会を得た。あわせて継続して資料の収集を進めるとともに、これまで発表した内容をまとめ上梓する準備を進めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 辻泰岳	4. 巻 -
2. 論文標題 方法としてのディスプレイ：国立近代美術館の会場設計について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文化資源学	6. 最初と最後の頁 53-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.24641/crs.16.0_53	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 辻泰岳	4. 巻 -
2. 論文標題 Metabolism in Visual Culture：菊竹清訓と田中一光の共同について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 DNP文化振興財団学術研究助成紀要	6. 最初と最後の頁 210-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 辻泰岳	4. 巻 -
2. 論文標題 アーキテクチュラル・ドローイングと戦後50年	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 紙の上の建築	6. 最初と最後の頁 22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 辻泰岳	4. 巻 -
2. 論文標題 戦後空間の肌触り：シンポジウム「民衆・伝統・運動体」について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 建築討論	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasutaka Tsuji	4. 巻 -
2. 論文標題 Outdated Pavilions: Learning from Montreal at the Osaka Expo	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Invisible Architecture: Italian and Japanese Movements in the 1960s	6. 最初と最後の頁 140-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasutaka Tsuji	4. 巻 -
2. 論文標題 On the Eve of Expo 70: The Japan Pavilion and Environment Art at the 1967 Montreal Expo	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Proceedings of 11th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia	6. 最初と最後の頁 807-812
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasutaka Tsuji	4. 巻 28
2. 論文標題 From Design to Environment: "Art and Technology" in Two 1966 Exhibitions at the Matsuya Department Store	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Review of Japanese Culture and Society	6. 最初と最後の頁 275-296
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1353/roj.2016.0038	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 辻泰岳	4. 巻 236
2. 論文標題 彫刻か模型か：フレデリック・キースラーとアーサー・ドレクスラーによる《エンドレス・ハウス》の設置	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立国際美術館ニュース	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 辻泰岳
2. 発表標題 祭の後始末：東京オリンピックとモントリオール万国博覧会の会場
3. 学会等名 デザイン史学研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 辻泰岳
2. 発表標題 戦後日本の芸術運動と展示空間に関する研究：伝統・デザイン・環境
3. 学会等名 文化資源学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yasutaka Tsuji
2. 発表標題 On the Eve of Expo 70: The Japan Pavilion and Environment Art at the 1967 Montreal Expo
3. 学会等名 11th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 辻泰岳
2. 発表標題 展示空間の中の「現代の眼」：国立近代美術館の会場設計について
3. 学会等名 明治美術学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 世界建築史15講編集委員会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 彰国社	5. 総ページ数 270
3. 書名 世界建築史15講	

1. 著者名 ハリー・フランシス・マルグレイヴ、加藤耕一監訳、伊良部頌、江本弘、高取万里子、辻泰岳、東辻賢次郎、長谷川香、福村任生訳	4. 発行年 2016年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 970
3. 書名 近代建築理論全史1673-1968	

1. 著者名 Rita Elvira Adamo, Cristiano Lipa and Federico Scaroni	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Silvana Editoriale	5. 総ページ数 247
3. 書名 Invisibile Architecture: Italian and Japanese Movements in the 1960s	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>researchmap https://researchmap.jp/yasutakatsuji/ 日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブ http://www.oralarthistory.org/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----